

実習に学ぶ「支援」の技法に関する一考察Ⅱ

—学生の振り返りを中心に—

石野 美也子

実習を通して、コミュニケーションのはかり方及び、相談支援を考える上での一助となるのではと、昨年に引き続き、実習からの学びを振り返りアンケート結果から、コミュニケーションをどう考えるか、実習後に自分のコミュニケーションは変化したか、保育者のコミュニケーションを見て学んだこと、記録の書き方を学んでの4点にしぼり、分析し考察した。

キーワード：実習、コミュニケーション、記録

1. はじめに

保護者の子育て支援は年々、緊急度を増し、必要性が高くなる一方である。そのことを受けてカリキュラムの改正や子育て支援新制度などがすすんでいる。次にカリキュラム改正における「保護者支援」の部分の抜粋してみる。

平成22年に第5回保育士養成課程等検討会に於いて保育士養成課程のカリキュラムの改正内容が発表された。

「社会福祉援助技術」は「相談援助」と変わり、さらに「保護者支援」が新しく導入された。

その背景には、保護者の子育てにおける孤立化、子ども理解の難しさが挙げられる。

教科目としては社会福祉援助技術であったものが次のように変更、及び付け加えられた。

「相談援助」「保育相談支援」(←「社会福祉援助技術」)(演習各1単位)

◇保育所における相談支援や保育士の保護者支援に係る実践力を育成するため、「相談援助」では従来の「社会福祉援助技術」を踏襲し、「保育相談支援」においては保育における保護者支援を中心に、相談支援の基礎的技術を習得する。

◇他資格の取得(科目の読み替え等)に配慮

した教科名とする。(保育士養成課程の改正内容について 参考資料3より抜粋)

子育て支援は保育所保育指針第6章に「保護者に対する支援」として「保育所における保護者への支援は、保育士等の業務であり、その専門性を生かした子育て支援の役割は、特に重要なものである。保育所は、第1章に示されているように、その特性をいかし、保育所に入所する子どもの保護者の支援及び地域の子育て家庭への支援について、職員間の連携を図りながら、次の事項に留意して積極的に取り組むことが求められる」「保育所保育指針」

また幼稚園教育要領第3章2には「2 幼稚園の運営に当たっては、子育ての支援のために保護者や地域の人々に機能や施設を開放して、園内体制の整備や関係機関との連携及び協力に配慮しつつ、幼児期の教育に関する相談に応じたり、情報を提供したり、幼児と保護者との登園を受け入れたり、保護者同士の交流の機会を提供したりするなど、地域における幼児期の教育のセンターとしての役割を果たすよう努めるこ

と。」「幼稚園教育要領」

両者ともその専門性を生かし、施設の機能を十分に活用することで保護者の支援及び地域の子育て支援を積極的に行うことが記されている。

先に述べた保護者の子育てにおける孤立化、子ども理解の難しさということが核家族や近隣との関係の希薄さという背景から相談する人がいないという現状を生み出す。それらは育児不安や些細なことから虐待の芽を生む。

2015年10月8日に厚労省より平成26年度の児童相談所での児童虐待相談対応件数の速報値が88,931件と報告された。過去最多の件数である。その背景には虐待の対象が広がり、2013年に虐待されているのを目撃した子どもや、子どもの前で親が配偶者に暴行を振るうことも子どもに対する心理的虐待と厚労省は自治体に通知を出した。そのことも虐待相談件数が毎年増えている要因でもある。

これらのことを見ていくと子どもと保護者の両者を守っていくことが保育者の業務としてさらに必要になってくる。それ故、保育相談支援はとても重要でありながら、仕事に就いてからゆっくりと経験を積みれば良いという時代は過ぎ、担任になればたちまち保護者対応が待っている。担任でなくとも子どもや保護者のどのような些細な変化も見逃してはならない。そのためにはどこかでソーシャルワークに関する実践に触れておかなければならないが、それはプライバシーの問題もあり大変難しい。そこで、昨年、実習を通して学ぶことは出来ないかと試行したものをまとめ（本学紀要2014、石野）一定の成果があった。

本稿では、その成果を踏まえさらに広く、実習後の振り返りを行うことによって、事前にコ

ミュニケーションや記録についての学習がどのような効果を生み、「支援」につながるのかを考察する。

本研究にあたり「実習」が実践における具体的なイメージを持つには最適であると考え、CiNiiで先行研究を調べたところ、「保育、実習」のキーワードでCiNiiに本文が有るものに絞り検索すると1,274件あるが、保育実習における評価や記録など具体的なものがほとんどで「相談援助」と「実習」を結びつけるものはなかった。

そこで「相談援助、実習」でCiNiiに本文が有るものに絞って検索すると52件ある。これらは相談援助を社会福祉の実習からとらえているものがほとんどである。これらの先行研究を見ると「実習」と「相談援助」を保育実習と結びつけているものは見当たらなかった。しかしカリキュラムツリーに見られるように、それぞれの科目がリンクすることの大切さと、そのことを意識しながら「実習」を行うのは、その効果において大きく差があるという考えのもとに、どのような変化が現れるかを本稿で考察する。

2. 研究方法

期間：平成27年6月末～7月

対象：相談援助の授業を受けている2回生全員にアンケートを採り、昨年と同じ150名を無作為で抽出した。

方法：実習に行く2週間前からコミュニケーションとエピソード記録の書き方を授業で行う。前回と同様、実習終了後の最初の授業でアンケートを行う。

分析：無作為で抽出した150名のアンケート結果を分析。

分析するのは前回同様、コミュニケーションへの理解と実習後の学びによってコミュニケーションは変化したかという

アンケート結果の分析、さらに前回、課題として残した保育者のコミュニケーションを見て学んだこと、及び直前に記録の書き方を学んで役だったかという2設題のアンケート結果の分析を加えた。

3. 振り返りの結果と分析

まず、平成14年度に行った2つのアンケートの質問と同じものを分析する。

問6. コミュニケーションをどのようなものだと考えますか

コミュニケーションへの理解に対する質問である。

2014年度

信頼関係を築く	13
相手の思いに気づく	10
非言語による重要性	31
他者を理解する	17
思いを伝える	33
人間関係を深める	53

2015年度

信頼関係を築く	31
相手の思いに気づく	9
非言語による重要性	20
他者を理解する	25
思いを伝える	20
人間関係を深める	27
その他	18

昨年度と比べ、信頼関係を築くが多く、また昨年6項目にまとまったのに対し、今年度はその他が18と多く見られた。その他の内容は、

生きていく上で大切なもの	10
心を豊かに成長させる	5

日常生活に欠かせない	1
ことばの発達を促す	1
表情を与える	1

と様々であるが、その他の中で最も多い、生きていく上で大切なものという回答は、自分の日常生活の中での人間関係を反映していると思われるが、残りの4項目は後述する保育者のコミュニケーションを見て感じたことと重なり、保育者と子どもの関係が大きく影響している。

次に2つ目の問いを分析する。

問9. 実習後にコミュニケーションの取り方は変わりましたか。

実習後に自分のコミュニケーションの取り方が変わったと感じる学生は140名で93%と圧倒的に多く、変化がなかったという学生は10名で全体の7%である。

変わらなかった理由は前年と同じで「実習に精一杯で考えられなかった」というものが多く、中には「子どもとのコミュニケーションは変わったが普段のコミュニケーションは変わらない」というものがあつた。このことが表しているように、実習後、変化があつたという学生は子どもとのコミュニケーションを通して気づきのあつたケース、子どもとのコミュニケーションから派生して自分の日常にも変化があつ

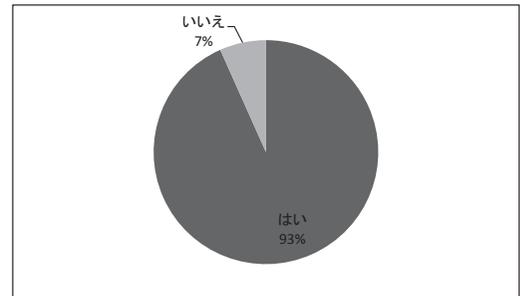


図1. 学びによるコミュニケーションの変化

たケース、支援にまで考えが広がるケースという3つに分かれる。

①子どもとのコミュニケーションを通して気づきのあったケース

- ・自分が積極的にかかわることで子どもの反応も変わった。
- ・子どもの見えない一面を理解するようになった。
- ・子どもに対して納得のいくように声掛けの仕方が変わった。
- ・自分の意見を押し付けずに、子どもの意見を大切にするため問いかけるようになった。
- ・問いかけられたことにすんなり答えられ、言葉だけでなく表情で伝えられるようになった。
- ・子どもたちの「聞いてほしい」という気持ちを受け入れられるようになった。
- ・子どもがつぶやいたことを拾って他の子どもと共有しようと思った。
- ・一方的に話すのではなく、子供の気持ちを引き出す問いかけをした。
- ・前は注意することしかできなかったが、今回は認めることを大事にかかわれた。

以上は、子どもとのコミュニケーションを中心に回答したケースであるが、子どもを通して相手を理解しようという思いが共通していた。

また、そこには小さなことも見逃さない姿勢と、相手を受け入れることが第一に考えられていた。

②子どもとのコミュニケーションから派生して日常にも変化があったケース

- ・自分の心を開くようになった。
- ・相手の思いを聞こうとするようになった。
- ・どんな人にも分かってもらえるように具体的に

に示すようになった。

- ・表情に気を付けるようになった。
- ・相手が気持ちよくなる挨拶を心掛けた。
- ・自分が伝わっていると思って理解していても相手に伝わらないと意味がない。どうしたら伝わりやすいかを考えるようになった。
- ・実習中、大きな声でといわれて実践したことで自信がつき、友人との会話も変化した。
- ・子どもとかかわることで、日常の会話や、イメージが広がり、会話がより楽しめるようになった。
- ・相手を気遣い、目上の人には敬語で話すことの大切さを感じた。
- ・ただ言葉を交わすだけでなく「どう思っているか」を大切にするようになった。

実習でのコミュニケーションを通して、日常に変化のあったケースである。このケースは自分の心に気持ちに向けて考えたり、子どもだけでなく保育者や保護者とのかわりの中で、自分の態度が変化したり、意識が変わったという特徴がある。また、コミュニケーションをとる上で、非言語的コミュニケーションに注意を払っている。

③支援にまで考えが広がるケース

- ・思いをうまく伝えられない子どもがいた時、思いを引き出すのが保育士の役割だと感じられた。
- ・保育士は分かりやすく伝えなければいけないと思い、友人にも分かりやすく伝えられるようになった。
- ・子どもの立場に立って考えるようになったため、だれに対しても、まず、相手の気持ちを知りたいと考えるようになった。
- ・相手の気持ちになり、その場の状況を把握で

きるようになった。

支援まで考えが広がるケースでは、保育士の役割に気付き、相手に寄り添うことの大切さを感じられた体験を通して、日常の中でコミュニケーションをとっている。これらは「支援」の大切さに気付いたケースといえる。

全体を通して、自分を客観的にみることができおり、前回に比べてという表現があるように実習を積み重ねて、余裕を持ってかかわることができ、自分が向かい合っている相手に対して、相手はどう思うのかと思いをめぐらせ、また、自分の意見やペースを押し付けることなく、相手の思いに心を向けることができている。

これらのことは、どのケースであっても「支援」を考える糸口となるものである。

次に前回の課題であった保育者のコミュニケーションを見て学んだこと、および、実習直前にエピソード記録を学んだことは役立ったかという2つの設問を分析する。

まず始めに保育者のコミュニケーションから学んだことについて分析する。この間に対する回答は、園児に対してのコミュニケーション場面と保護者に対するコミュニケーション場面に分けることが出来る。

問. 10 保育者のコミュニケーションを見て学んだこと

①保育者と園児のケース

- ・一人ひとりに合った関わりをしていた。
- ・保育者が笑顔でいると周りが明るくなる。
- ・目を見てコミュニケーションをとることの大切さ。
- ・丁寧な言葉遣い

- ・子どもの小さな変化に気付く。
- ・褒めることで自信につながる声かけ
- ・子どもたちの思いを受け止める
- ・肯定的なことばで伝える。

②保育者と保護者のケース

- ・子どもと保育者だけでなく、子どもと子ども、保育者と保護者など様々なコミュニケーションがあること。
- ・保育者が保護者に子どもの様子を詳細に伝えることの大切さ。どんなに小さな出来事でも伝えることによって保護者は「先生は子どもを見ていてくれる」という気持ちになり、信頼関係が深まる。
- ・保護者の方ととても細かいところまで報告していた。安心できる場としての信頼を築いているのがわかった。
- ・気軽に子どもに関しての情報交換が行われていて保護者と子どももいきいきしていた。子どもも大人も話しやすい雰囲気が大切だとわかった。
- ・子どもの姿を良く理解した上でコミュニケーションをとり、職員、保護者、子どもと共有していくことが大切。
- ・保護者同士が愚痴を言える雰囲気ではそれは保育者という存在が近くにいるから安心していえると思える雰囲気。

これらの回答より保育者と園児のケースは前述した学生の実習後のコミュニケーションの変化に大きな影響を与えているということがわかった。

また、保育者と保護者のケースについては、大きく「信頼関係の構築」と「安心できる環境」という2つに分けられる。保育者は立ち話や日々の保護者や園児の変化に気付くことから支援が

始まることもめずらしくない。そのことから見ても、保育者の関わりから安心できる親子の姿に気付けたことは、今後の支援に非常に有効である。

最後に、記録の書き方を実習の直前に学んだことについての回答を分析する。

記録の書き方を実習の前に講義したのは、日頃学生が実習簿に時間がかかると言っていたため少しでも早く書ければと思い行った。幼稚園や保育所での記録の書き方は専門の授業で行っているため、ここでは「相談援助」に必要なエピソード記録の書き方とそこに至るまでのプロセスを伝えた。記録に至るまでのプロセスは以下のとおりである。

①エピソードをわかりやすく書くためにメモが許可されるなら、休憩時間にメモをとること。許可されないまたはとらない方がいいと思った場面では覚えておくこと。

②記録を書く前に、まず自分のメモ帳に一番印象に残った順番に書いていく。

③記憶に残ったものを時系列に番号を振る。

④③を実習簿に記録する。

⑤自分のメモに今日1日自分の頑張ったことを書いてにこにこマークをつけておく。これは記録には書けないような些細なこと、たとえば大きな声で挨拶が出来たであるとか、今日は1日良い笑顔であったなど、必ず自分の頑張ったこと、楽しかったことを書く。

⑥最後に1日の反省として困ったという絵文字を入れ自分の今日の実習を振り返る。

⑦反省は次の日からの課題と考え出来るように努力する。

以上が、実習直前に行った記録の書き方の講義の内容である。以下に結果と分析を行う。

問8. 実習直前に学んだ記録の書き方は役立ちましたか

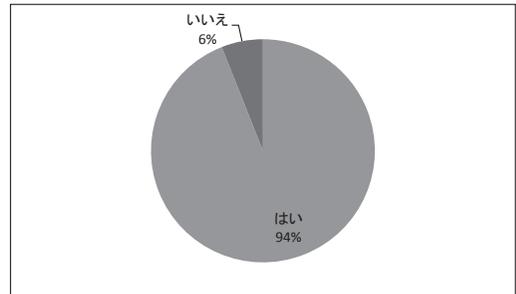


図2. 記録の書き方を学び役立ちましたか

回答は、はいが141名で94%、いいえが9名で6%であった。

記録の書き方は、前述したように記録が早く書けるようになればと言う思いから授業で取り上げたが、思いがけず、回答は広がりを見せた。

①記録に役だったケース

- ・記録を書く上で効率よく出来た。
- ・詳しく記録することが出来た。
- ・書き間違いが減った。
- ・事前に学んですらすら書けた。
- ・意識しながら書けて良かった。

②記録から広がりを見せたケース

- ・一日の流れがわかり安心して実習できた。
- ・事前に考えておくことで落ち着いて対応できた。
- ・学んだことから自分なりのメモの取り方を考えた。
- ・反省することで前向きになれた。
- ・行き詰まった時に楽しかったことを見て頑張れた。

以上のように記録から実習全体に派生したこ

とは思いがけないことで有り、今後は記録から発見できるものも詳しく考察していきたい。

4. まとめ

本研究を通して、実習が相談支援の入り口としての学びに有用であることがわかった。

それぞれの項目を通して、自分と他者の関わりに気付くことが出来ている。また保育者という自分にとってのモデルがあることで自分を振り返ることが出来、相手に寄り添う大切さを「実習」という場面で学べていると感じた。

また記録については、記録だけにとどまらず、それを書くプロセスの中で一人一人の園児と保育者の関係に目を向けられたことで「個別化」と言うことを体験としてとらえられた。

今後はその内容をさらに考察するとともに記

録を含め、実習後の振り返りを通して、自分の心に問いかける授業を展開することでさらに「支援」への理解が深まると考える。

今後は、自分の心に問いかける授業内容及び教材の在り方を考えることを課題としたい。

(参考文献)

1. 小島千恵子「保育者を目指す学生の『保育』の意識に関する研究－実習前後の自己意識の自覚の変化を中心に－」名古屋柳城短期大学研究紀要 第34号 (2012)
2. 小島千恵子「実践力を身につけるための実習プログラムの構築－学生の実習後の「保育者の資質と力量」についての振り返りの記述から－」名古屋柳城短期大学研究紀要 第35号 (2013)
3. 長谷秀揮「保育実習Ⅱにおける学生の学びにおける一考察」四條畷短期大学紀要 第47号 (2014)
4. 石野美也子「実習に学ぶ「支援」の技法に関する一考察－学生の振り返りを中心に－」京都文教短期大学研究紀要 第53集 (2014)

